

リレートーク1

住み続けたいと感じるまちづくりー 戸田ヶ原自然再生事業

埼玉県戸田市 市長
神保 国男 氏

戸田市長の神保国男です。よろしくお願いたします。

ご存じのように、今年は、国際生物多様性年ということで、愛知県の名古屋市で10月に生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催されるわけですが、現時点で3ヶ月を切ったところとなっております。本日のこの国際フォーラムは、開催趣旨にもありますように、この締約国会議のイベントとして行われるということであり、その後予定されております各ご講演者の方々の取り組みと比べますと、本市の取り組みは小さな取り組みではありますが、このような場で、発表できる機会をいただきまして、主催者の皆さまに深く感謝申し上げます。

それでは、戸田市で行っております「戸田ヶ原自然再生事業」についてお話をさせていただきます。この事業は、生物多様性の保全が大きなテーマとなっておりますが、ふるさとの自然や原風景を市民とともに取り戻すことによって、市民が誇りと愛着を持って住み続けることができ、また戸田市に住んでみたいと思っただけのまちづくりに役立てることを目指しています。ふるさとの自然を取り戻すことをまちの活力につなげるという意味で、本日のフォーラムのテーマである「生物の多様性と経済の自立」と関連深いと言えるのではないかと考えています。この事業は、2年間の検討・準備の期間を経て、昨年、平成21

年に開始され、現在、具体的な湿地の再生を行っているところです。

それではまず、私たちのまち「戸田市」についてお話をさせていただきます。戸田市は、都心から20km圏内の埼玉県南東部に位置し、荒川を挟んで東京都に接しています。市の面積は、約18平方kmで、市内には、JR埼京線の駅が3駅あり、新宿駅へは約20分という鉄道交通の便に恵まれていることから、人口は毎年増え続けており、平成22年7月1日現在、約124,000人となっております。また、平均年齢が39歳と県内で一番若く、子育て世代が多いという特徴があります。

市内には、首都高速5号線、東京外かく環状道路、国道17号等の幹線道路が通り、道路交通の面でも利便性の高い都市で、大変市街化が進んでいますが、市の西側には荒川や彩湖という広大な荒川の調節池があり、首都近郊のまちとしては水と緑に恵まれているところでございます(図-1)。ほかにも、日本で人工の静水コースとしては唯一の戸田ボートコースがあります。昭和39年の東京オリンピックの漕艇競技はここで行われました。現在も全国大会から市民大会まで毎年、数多くの大会が開催されているところでございます。

戸田市は平均年齢が若く発展しているまちですが、今後、国の人口が減少して行くなかで、多

くの方に戸田市にふるさととして住み続けていた
 だくためには、新たなまちの魅力づくりやイメ
 ジアップは欠くことができないものと考えておりま
 して、本事業はそのひとつの柱として位置づけ
 ております。

次に「戸田ヶ原」についてお話します。「戸田
 ヶ原」は、かつて戸田の荒川沿いに広がっていた
 湿原で、約300年前の書物に『戸田原』という
 言葉が見られます。江戸時代後半には、サクラ
 ソウの名所として広く知られ、花の名所をまとめ
 た書物や歳時記、短歌などに取り上げられ、春
 には多くの人々が花見に訪れたと伝えられてい
 ます(図-1)。右側の絵は、二代目歌川広重が
 描いた浮世絵「戸田原さくらそう」であります。左

は、江戸時代の後半、今から約160年前の書物
 に書かれた「江都(えど)近郊名勝一覧」での戸
 田の渡しについての説明です。「戸田の渡しは
 サクラソウの名所で、春、花が咲く頃は毛氈を敷
 いたようである。江戸から多くの人を訪れてこれ
 を鑑賞した」と書かれています。

これは、江戸時代後半、約180年前の地図で
 す(図-2)。中仙道が荒川を越えるところに「戸
 田の渡し」がありました。この渡しの上流に「サク
 ラ草アリ」と書かれております。また、ほかの江戸
 時代の書物には、戸田ヶ原は「戸田の川上に沿
 いたる原」と書かれています。

明治の後半になると、今度は行楽案内や新聞
 で戸田ヶ原のサクラソウが紹介され、多くの人
 がサクラソウを摘みに訪れるようになりました(図-
 3)。女学校の遠足でサクラソウ摘みに来たとい
 う新聞記事も見られます。正岡子規はその様子
 を「武蔵野に春風吹けば荒川の戸田の渡しに人ぞ
 群れける」と詠んでおります。ところが、花摘みは
 大変な人気で、訪れる人は年々増え続け、わず
 か数十年後の大正時代の末には、ほとんどサク
 ラソウはなくなって壊滅的な状況になってしま
 いました。その後もサクラソウは部分的には残っ
 ていましたが、開発や戦後の農地化などによっ
 て、昭和20年頃までに、残念ながら「戸田ヶ原」は完

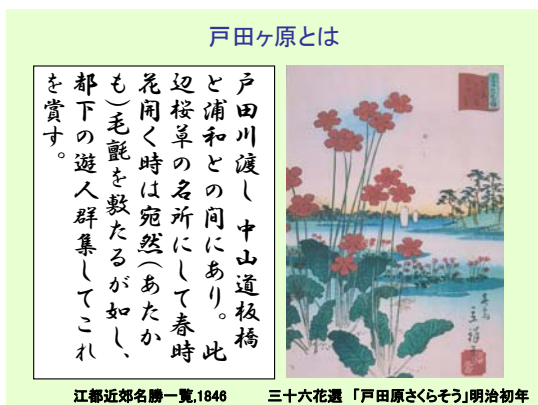


図-1



図-2

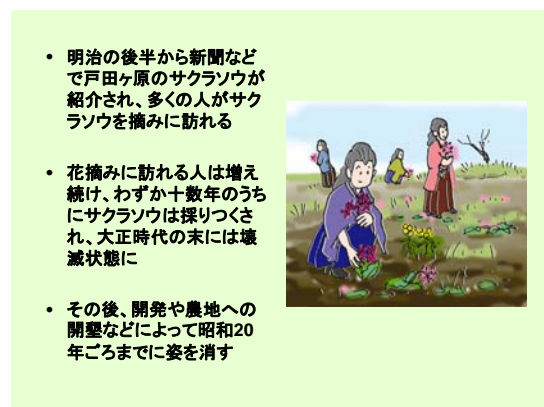


図-3

全に姿を消してしまいました。これが戸田ヶ原の歩んできた道であります。

「戸田ヶ原」は、都心から近く、様々な植物が生育する湿原だったため、明治以降、植物学者がたびたび植物採集に訪れていたようです。植物学者による「戸田ヶ原訪問記」も残されています。「トダスゲ」「トダシバ」という植物がありますが、これらは戸田ヶ原で見られたことから、戸田の名前が付けられました。「トダスゲ」は、大正5年に戸田ヶ原で発見され、牧野富太郎博士によって名付けられました(図-4)。全国的にも自生地が限られ、戸田の周辺では絶滅したと思われていましたが、平成4年に戸田市の荒川対岸の朝霞市で数株が再発見され、それを戸田市の「トダスゲを育む会」が中心となって増やしてきました。「戸田ヶ原自然再生事業」では、この増やしていただいたトダスゲを戸田ヶ原自然再生の目標種のひとつとして、再生エリアに植栽しています。ほかにも戸田の名前が付く生きものとして、戸田市内の荒川河川敷の小さな池で昭和60年に発見された「トダセシジゲンゴロウ」がいます。

戸田ヶ原自然再生事業は、乱獲や開発で失われてしまった「戸田ヶ原」を再生し、将来世代へと伝える事業でございます。事業の目標は次のとおり3点あります(図-5)。ひとつめの目標

は、「多様な野生の生きものを育む戸田ヶ原を再生する」ということ、すなわち生物多様性の保全です。2つめの目標は、「失われつつある人と自然、人と人との交流を再生する」ということです。かつて子どもたちが、自然のなかでの体験を通じて健全な心や体を育んできたように、人と自然との交流を再生するとともに、子どもと高齢者のふれあいなど、失われつつある世代を越えた市民の交流の場にしていこうとするものです。3つめの目標は「住みたい・住み続けたいまちづくりに活かす」ということです。戸田ヶ原の自然再生をまちの魅力づくりやまちの活力につなげていこうとするものであります。

戸田市の荒川沿いには、国土交通省により整



図-5

名前に「戸田」がつく生きものたち

- トダスゲ**
 - 大正5年に戸田ヶ原で発見され、牧野富太郎博士によって命名された
- トダシバ**
 - 戸田ヶ原に多く生育していたことから命名された
- トダセシジゲンゴロウ**
 - 1985年に戸田市内の荒川河川敷の小さな池で初めて発見されたことから命名された

図-4



図-6

備された「彩湖」と名付けられた広大な荒川の調節池があります。「戸田ヶ原自然再生事業」は、この彩湖周辺区域で行っています(図-6)。彩湖周辺区域は縦方向が約4.2km、横の広い部分が約1.3kmと広大な場所です。この場所は河川区域で、国の荒川上流河川事務所が管理をしています。その一部は公園として戸田市が管理をしています。そのため、荒川上流河川事務所に協力していただきながら事業を進めることにしています。

彩湖は人工的につくられた広い池ですが、戸田市が管理をしている公園などには、荒川が蛇行していたころの昔の河道が池として残されています。湿地の再生は、かつて湿地があったと考えられる、昔の河道沿いを中心に進めていく予定です。かつての戸田ヶ原には、少し地形が高

く乾いた草地や低く湿った草地、小さな池やハンノキの河畔林など、多様な自然環境があり、多様な生きものを育んでいたと考えられます(図-7)。戸田ヶ原自然再生では、こうした多様な自然環境の再生を目指しております。この事業では、かつての戸田ヶ原で見られた多様な自然環境を再生して、ただ今、ご覧いただいているように、様々な生きものが暮らせるようにすることを目指しています。そのなかの指標となる生きもののひとつがサクラソウであり、トダスゲであります。

しかし、あまり多くの生きものを並べても市民には分かりにくいということもあり、姿が美しいなど市民に興味をもってもらえそうな生きものや、「戸田」の名前が付く生きものをシンボル種として選定し、そのうち5つのシンボル種が象徴する自然を再生することにしました。それがここに示す5

かつての戸田ヶ原にあった多様な環境を再生し・・・

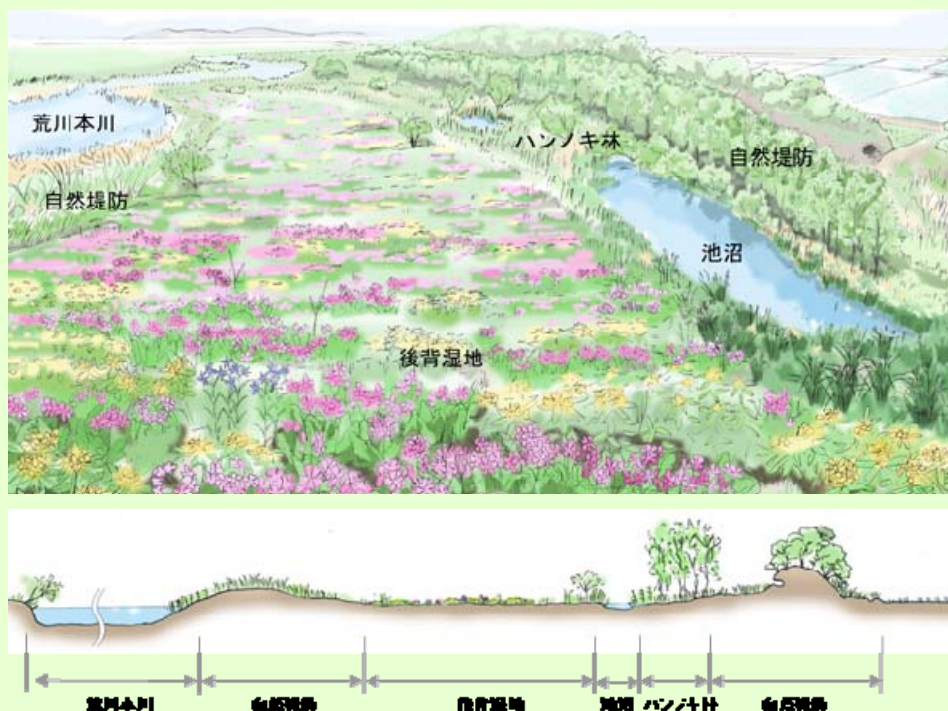


図-7

つです(図-8)。上から右回りに、「サクラソウなどの野生の草花が彩る湿地」。サクラソウをはじめとする、様々な草花や湿地の鳥、カエル、メダカなどの生きものが暮らす湿地をつくります。「キツネの親子が安心して暮らせる草はらや森」。彩湖の周りでは、キツネの親子が確認されています。キツネが繁殖している場所としては、都心にもっとも近い場所ではないかと考えています。「ミドリシジミが舞う林」。ミドリシジミは小さな緑色に輝くチョウで、幼虫は湿地に生えるハンノキの葉を食べて育ちます。「カヤネズミがゆりかごをつくる草はら」。カヤネズミは、世界最小ネズミのひとつで、ススキやチガヤの葉っぱで鳥の巣のような巣をつくります。「カワセミが子育てをする水辺」。水辺の宝石と呼ばれるカワセミが繁殖したり生活する場所をつくります。これら5つのうち、まず、最初に具体的な事業がスタートした、「サクラソウなどの野生の草花が彩る湿地」の再生についてお話をいたします。

「サクラソウなどの野生の草花が彩る湿地の再生」は、この図にピンクで着色した5ヶ所で実施する予定です(図-9)。これらは、先ほど見ていただいたように、荒川の昔の河道の近くなどを中心に設定しています。昨年度から、このうちの1ヶ所について湿地の再生を始めました。面積は

約0.6ha、ヨシやオギなどが生息する草地だった場所で、これまでは浚渫土などが置かれていました。この場所の自然再生のしかたについて、植物の専門家である埼玉大学の佐々木教授を会長とする「戸田ヶ原自然再生検討会」で検討をしていただき、表土を保全しながら一部を掘り込み、水分条件に変化をつけることにしました。この場所は、「戸田ヶ原自然再生」の第1号地であるとともに、今後、湿地の再生区域を拡大して行くための基礎的なデータを収集するための試験地としても位置づけています。

今年の2月27日に、造成した「戸田ヶ原自然再生第1号地」で「とりもどそう！戸田ヶ原サクラソウフェスタ」を開催いたしました(図-10)。多く



図-9



図-8



図-10

の市民に参加をしていただき、サクラソウ約600株とトダスゲ約500株の植栽を行いました。あいにくの天気でしたが、私も泥んこになりながら参加いただいた皆さんと一緒に植栽を行いました。小雨が降り続くなか、皆さんの楽しそうに植栽をしていただいた姿が印象的でありました。

ここで植えたサクラソウは、戸田ヶ原産のサクラソウを、家庭の庭で育てていた方から苗を分けていただいたものです。植栽にあたっては、事前に筑波大学にDNA鑑定をしていただき、荒川流域産と判定されたものを用いています。トダスゲは、荒川対岸で発見されたものを市民が増殖し、それを分けていただきました。このように、遺伝子レベルの生物多様性の保全にも配慮した取り組みを行っています。

「とりもどそう！戸田ヶ原自然再生フェスタ」も、多くの市民に参加していただき実施しました。戸田ヶ原自然再生事業は、「人と自然、人と人との交流を再生」「住みたい・住み続けたいまちづくりに活かす」ために、多くの市民、NPO、事業者と協力をしていただき、植栽や管理などにかかわっていただくことにしています。まちの個性を分かりやすく広める自然再生の取り組みは、市民やNPO、事業者の方々にも気軽にまちづくりに参加していただくきっかけとして有効な方法

だと思っています。植栽したサクラソウは春には花を咲かせトダスゲは芽を出しました(図-11)。

そして現在、これは事前に予想していたことですが、外来植物との戦いが始まっています。市民やNPO、事業者と協力をしていただきながら、オオブタクサやセイタカアワダチソウなどの外来植物の抜き取りを行っています。これは、抜いたオオブタクサを使って草木染めをした時の様子です。管理と自然体験とセットにしなが、より多くの方々に楽しく自然再生に関わっていただきたいと考えています。

この事業では、荒川河川敷だけでなく、再生した自然をまちの中に広げていくことを目指しています(図-12)。公共施設や街角でビオトープ



図-12



図-11

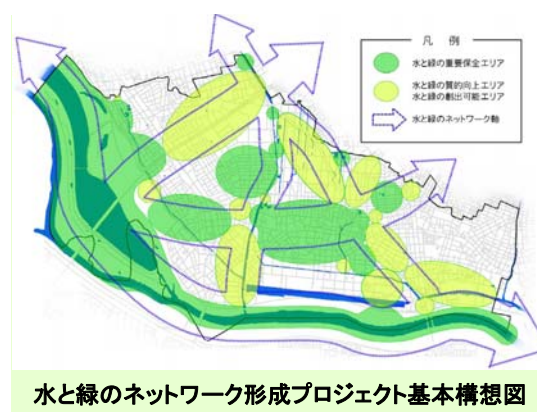


図-13

をつくったり、戸田ヶ原に植栽するサクラソウやハンノキの苗を学校や個人の庭で育てたりすることによって、自然をまちに広げ、ネットワークしていきます。現在、戸田市では、市内の自然を保全・再生し、市全体の生物多様性の保全を目指した「水と緑のネットワーク形成プロジェクト」というものを並行して進めております(図-13)。

私は、市長就任当時から、まちのなかに多くの自然を取り入れたまちづくりについて取り組んできました。市内を走る埼京線、これは延長約4.9kmありますが、その両側にある幅約20mの環境空間を緑地・緑道として整備しています。また、現在、施行中の土地区画整理事業地内にビオトープを創出するなど、多くの生きものが生息することができる環境整備などを進めています。このプロジェクトでは、多種多様な生きものや人間が持続的に豊かな生活をおくることができるよう、貴重な自然を保全するとともに、多様な関係主体の参加によって地域の在来植物にも配慮した植物の育成・植栽などを行うことで、分断された自然のネットワーク化を図ることにしています。こうしたことで、いろいろな生きものの移動経路の確保や自然の多面的な機能を回復させることによって、豊かな自然を再現し、潤いのある質の高い都市環境の実現を目指した取り組みを進めて

おります。そして、この取り組みを進めるために、「戸田ヶ原自然再生事業」で再生された自然を本市のエコロジカル・ネットワークの核として位置づけ、市内各所の自然拠点へつなげていくことを考えております。

私は、市長として、市民が戸田市で暮らすことに誇りと愛着をもち、「住んでよかった、これからも住み続けたい」といえるまちづくり、「戸田に住んでみたい」「戸田に移り住みたい」といえるまちづくりを目指してきました(図-14)。こうしたまちであるためには、戸田市ならではの魅力と個性が必要と考えています。「戸田ヶ原」は、戸田市の個性の源である自然であり、また、歴史であり、文化であると考えております。この戸田市の個性を再生して、将来世代に手渡すこの事業は、「環境の世紀」を迎えたこれからの戸田市にとって、最も重要な事業であると考えています。戸田ヶ原自然再生事業は、その一步を踏み出したばかりの取り組みですが、その道の先には、私の目指す、まちの姿が広がっていくと確信しています。

ご清聴ありがとうございました。



図-14

